

ちょっと人権

少し分りかけてきたぞ「自尊感情」！号

人権教育セミナー短信 No. 3 平成 17 年 7 月 26～27 日

学校支援部 人権教育担当

子どもは、子どもであることだけで愛されるべき存在

群れ遊びが貧弱な時代だからこそ、学校・園所が大切にすべきことは・・・

第3・4講座 自尊感情を育む人権教育

心配した台風は進路を東に変更。強風に見舞われたものの予定どおり県内2会場(第3講座:佐賀町、第4講座:吉川村)で開催することができました。「自尊感情」の講座はただでさえ人気がありますが、今年の講師が、あの「新保真紀子」さんでしたから、2講座合わせて200名近くの参加がありました。担当者としては嬉しい！の一言に尽きます。ありがとうございました。

1 講演 いま、どんな気持ち？～子どもたちの自尊感情を育てる～

〔神戸親和女子大学 助教授 新保真紀子さん〕

1. 「気にせんととき」という発言

新保さんが松原三中などで素晴らしい実践をされていたことは、みなさんよくご存知ですよね。担任時代に心がけていたことのひとつに「気にせんととき」「関係ない」と言う生徒を育てない！があったそうです。悩んでいる子どもは「誰かに相談したい」「この人になったら言えるかもしれない」と迷いに迷って、その挙句にカミングアウトしているのです。そんなとき相手に「気にせんととき！」と返されたらどうでしょうか。来る日も来る日も気にして悩んで、悩み続けて、この人だったら大丈夫かもしれないと心に決め、張り裂けそうな思いでカミングアウトした子どもに対して、このことばは厳しすぎます。スバツと関係を絶ってしまう、まさにカミソリのようなことばです。発言者を絶望のどん底に突き落とす恐ろしいことばです。

新保さんは言いました。「エッジ(境界線)を越えたときに、どう反応できるかが大事だ」と。「必死の思いでカミングアウトして受け容れられたときに、その子は『こんなわたしでもいいんだ！』と思う。この『こんなわたしでもいいんだ！』と感じる機会を何度もつくり味わわせる。これしかない、この積み重ねしかない」と・・・。



2. 教師と「カウンセリングマインド」

唐突ですが、みなさん、子どもたちの話をよく聴いて(聴けて)いますか？「聞く」ではなく「聴く」です。新保さんは次のように言いました。「門構えのなかに閉ざされた小さな耳で『聞く:hear』のではなく、ウサギのように長い耳を使って十四の心で『聴く:listen』のです。」

ちょっと振り返ってみてください。何かが起きて子どもたちに事情を聴くような場面を。最初は確かに話を聴いているのですが、徐々に事情が分かってくると次第にあなたが話す場面が増えてきませんか？そして最後には、あなたが一方的に説教し喋りまくっている。言いたいことを言い切ったあなたはスッキリし、当の子どもはモヤモヤが残ったままで、何も解決していない・・・。残念ながらこんな例は少なくありません。

みなさん、あなたの悩みを心底から聴いてもらった経験はありませんか？気持ちが軽くなりホッとしますよね。相談してよかった、仲間っていいな、人間っていいな、なんて感じますよね。ふと考えたんです。わたしたちは子どもに話を「聴いてもらう心地よさ」を感じさせているのだろうか。と。カウンセリングマインドの重要性は十分に認識され、現場でも活用もされ始めています。これは非常に嬉しいことです。でも教師はカウンセラーではありません。教師とカウンセラーの違いは何でしょうか？どこにあるのでしょうか？少々強引ではありますが、カウンセラーはクライアントのみを対象としますが、教師は違います。その周りを取り巻く仲間をも含めた集団を対象として取り組みます。特に人権教育においてはそうですね。

最後に「聴く」の極意を紹介して、この項は終わりとします。新保さんが教えてくれたポイントは、次の3つです。意識して実践してみてください。

- ①あなたはとても大切だ、だから何でも話してほしいという態度・姿勢。
- ②(子どもの「先生、聴いてくれる？」という問いかけに対して)その表情や口調に波長を合わすこと。(相手が軽い感じで話しかけてきたら軽い感じで返し、実は・・・と重苦しい感じなら、静かにどうしたの？というように)
- ③受容し感謝すること。



3. 「自尊感情」は獲得していなければならないの？

近年、自尊感情の育成に取り組む学校や園所は多く、何かひとつのブーム？であるかのようです。自尊感情の育成が目的化しているのではないかと心配する向きもあります。ここで改めて考えてみましょう。「自尊感情、自尊感情というけれど、獲得できていなければならないのでしょうか？」・・・この問いに対し、新保さんは次のように答えてくれました。「いけないことはないが獲得できているほうが『豊かに生きること』につながりやすい」と。そしてこう付け加えられました。「自尊感情が十分に育まれていなくても『レジリエンス』があれば大丈夫だ」と。

レジリエンスとは「可塑性」。元に戻る力のこと。ボールをつぶそうとして強く押し込んだときに撥ね返ってくる力のことです。人によっては分かりやすく伝えるために「しなやかさ」とか「しぶとさ」などと訳しています。たとえ被差別の状況にあったとしても、それをバネにしてがんばる力や、一般的には困難と言われる状況を、逆に「力を発揮する場」ととらえ、受け容れることができる力などがそれです。失敗をくよくよ考えすぎない楽天的な性格もこれに含まれるかもしれませんね。

それから、新保さんはこんなことも言っていました。「最近こんな子どもが多くはないですか？教師から見たら決して満足できる状況ではないのに、現状でいいんだ、わたしは満足しているんだ、という子どもが」と問いかけ、これを「張りぼての自尊感情」と呼びました。そして最後に、まさにこれは「学習された無力感」以外の何物でもない、とまとめられました。

この話を聴き、担当者は次のように感じました。見た目だけ大きな、風船のようにフワフワですぐにつぶれてしまうような自尊感情よりは、非常に小さかったとしても固くて強い自尊感情、少々人に何かをされようが、びくともしない自尊感情(レジリエンスにつながる芯の部分といった感じでしょか)の育成が大前提で、そのうに達成経験などを積むことで、年輪のように少しずつ少しずつ自尊感情の層を積み重ねていく・・・これこそが人権教育のめざす「自尊感情」の育成ではないでしょうか。

2 実践発表 自尊感情の育成 [高知市立一宮小学校 教諭 塚地久美さん]



昨年度の教育センター研究生としての一年間の研究を、現場の学びに位置づけ実践を重ねる塚地さん。「自尊感情の育成」をキーワードに取り組んだ様々な研究を、豊富な資料を用意して熱く語ってくれました。2クラスでの検証授業の回数は10回に及ぶに及び、子どもたちから寄せられた「楽しかった」「普段の自分に生かしたい」という塚地さんの発表にうなずき、思わず顔がほころびました。

「特効薬のように絶対有効なアクティビティというのはない。けれども、クラスの実態に合ったアクティビティは、必ず子どもたちの自尊感情を育む道筋を示すはず。わたしたち一人一人が、クラスの子どもたちとともに「学びの主体」となり、研究を積むことが大切なのです。」塚地さんの地道な研究と、新保さんの講演をセットで聴くことができ、非常によい講座となりました。

気をつけて！
新保さんからの
メッセージ

一宮小学校における自尊感情の育成の取組を見聴きて、「アクティビティをすれば自尊感情は獲得できる」と安易に考えないでください。一宮小学校にはこの報告以外にも人権教育推進校としての各種の分厚い取組があるんです。今日の実践報告はその一部に過ぎないんです。

3 ワークショップ アサーションで解決しよう！

[高知県教育センター 人権教育担当]

アサーションやアサーティブネスとは、自分の気持ちや思いを相手に伝え、理解を深めるための手法です。攻撃的にならないような形で自分の思いを相手に伝えるというものです。説明を聴くと分かったような分からないような・・・実際にやってみたらもっと分かったような分からないような・・・。担当者は、正直なところ、「感じはつかめたよ！」というレベルです。アサーションっていうのはいわば、「攻撃的」でも「受身」でもなく、自分の主張もしっかりと織り込みながら、相互理解をより深める、誠実で率直なコミュニケーション・スキルです。もちろんそれを、使うのも使わないのも自由、伝えることばの内容も自由に選択できる、そんな、アメリカ生まれの、とっても柔軟な手法なんです。そんなスキルをわずか3時間程度で習得してみよう、高めてみようという、欲張りなワークショップでした。

3人1組でにぎやかに、しかもにこやか ロールプレイをしているグループが多く、スキルの習得状況はともかくとして、活気のある研修となりました。

中身の濃い充実した2日間でした。ところで新保さん、風邪治ったかなあ・・・。

